カナダ研究の邦語文献

東京大学教養学部
アメリカ研究資料センター助教授　大原　祐子

日本カナダ学会が、カナダ大使館よりカナダ研究に関する邦語文献目録の作成を求められたのは、昨年の初夏のことであった。対象を社会科学、人文科学の分野にしぼり、爾来約半年あまり、運営委員会が依頼した十一名の学会員（飯沢英昭、伊藤勝美、大熊忠之、岡本民夫、木村和男、国武輝久、竹中豊、千田明夫、原口邦紘、南良成の諸氏と大原）がこの作業にあたり、このほど完璧にはほど遠いものながら、当初に目的としたところをほぼ達成した。収集した文献カード数は千二百点余り（単行書四百十一点、論文八百三十八点）にのぼった。もとより原則は、戦前、戦後を問わず新聞記事以外、カナダについての日本語による研究はすべて、と広範囲に規定したつもりであったが、戦前の研究は非常に少なかった。

この文献収集の最大の問題は、短期間に行なった作業であったので系統的に収集することが難しく、作業に従事した研究者の個性により、粗密の差が顕著であるということであろう。しかし、専攻分野を異にした十一人の研究者が文献を収集したので、少数の人間が例えば『雑誌記事索引』や『出版年鑑』を渉猟したのでは追い付かない、多方面にわたるものを収集し得たと思う。

この文献目録はカナダ大使館から印刷の予定と聞いているが、この作業に従事してさまざまな感想をもつに至った日本カナダ学会でも、二、三年先には網羅的な、例えば新聞記事、卒業論文まで含んだカナダ研究についての文献目録を、学会の事業として刊行したいという声が出ている。関心のある方々からのご意見、ご批判が伺えれば幸いである。

さて集まった文献名を、原口氏の献身的な御協力を得て整理し、大雑把に項目分けしたところ、何といっても「経済」の項が一番多く、三百十五点（単行書百六点、論文二百九点）にのぼった。これに「国際経済」（三十二点）、「労働」（四十六点）、「社会保障」（三十七点）、「運輸・通信」（二十一点）を加えると、全体の約三十七パーセントが経済関係ということになる。次に多いのが教育を含めた「社会」で百五十三点、以下順にあげると、「日系移民」百二十九点、カナダ紀行を含めいわゆる「カナダ一般」を論じたもの百二十六点、「政治」百二十二点、「日加関係」八十五点、「文学」七十六点、「歴史」七十一点、「地理」三十二点、という次第であった。それぞれの項目を検討するならば、日本におけるカナダ研究の一端が明らかになる筈であるが、ここでは「日加関係」の項目に収録されている文献について眺めてみたい。

まず単行書を一覧してみると、日本とカナダの関係について、例えば日米関係の研究にみられるような、いかなる視点からのものにせよ総合的に論じたものが、未だに全く無いことに気が付く。二十三点の単行書の傾向を代表するものは『日本経済とカナダ』（キース・A・J・ヘク著）であり、『日加経済関係の諸問題』（経団連事務局編）や『アジア・太平洋と日本―豪州、カナダと日本経済』（伊東敬著）であって、『加奈陀メソヂスト日本傳道概史』（倉長巍編）に類する研究は、もっと関心が払われてよいテーマであるにも拘らず、一九三七年刊のこの一書があげられるだけである。

一方六十二点にのぼる論文の方は極めてバラエティに富み、今後研究書に発展する礎となるであろうものも少なくない。ここでも量において多いのは日加経済関係であり、とくに西部カナダが、「木材と鉱物資源の豊庫―近づく西部カナダと日本」（斉藤文則『世界週報』五〇―八）や、「カナダ西部における資源開発と日本の関係」（三橋節子『地理』一一〇―八）に示されるように、ジャーナリズムと学界の双方から深い関心の払われている点が印象的であった。日加間の政治問題には経済に寄せるほどの関心は示されておらず、カナダの中国承認問題と日本を論じた二点の論文（伊藤喜久蔵「カナダの中共承認と日本の立場」『自由』一二―一二、渡辺一郎「中加の国交樹立と日本」『公明』九八）が目についた程度である。

日加関係について、ある意味で本質をつく情報を提供しているものは、「カナダにおける日本研究の現況」（馬場伸也『学術月報』三〇―一〇）と、「日本のカナダ研究―素描」（大熊忠之『国際問題』二一三）の二論文であろう。扱い方は全く異なるこの両論文を読んで受けるある種のショックは、カナダの日本研究とくらべた日本のカナダ研究の、少なくとも規模における狭少さである。大熊氏も指摘している通り、日本人がカナダを知ることがいかに限られているか、が浮き彫りにされているといっても過言ではない。

そうした中で、日加の歴史的関係の展開については、「占領とノーマン」（馬場伸也『思想』六三四）や「日本、カナダ関係の一考察―『ルミュー協約』改訂問題」（原口邦紘『国際政治』五八）のように、豊富に原資料を駆使して日本とカナダの一様ならざる関わりあい方を明らかにする研究のあることは、非常に重要である。こうしたアプローチの研究を重ねること以外に、日加関係の真の姿をとらえることはできないのではなかろうか。同じような観点からするならば、本紙に掲載された、猿谷要「カナダと新渡戸稲造」（一一二）、大窪愿二「伊藤博文のカナダ旅行」（「トルドー首相来日特集号」）も短かいエッセイであるが興味深い。

単行書の項でも言及したが、日本とカナダの深い関係の一つにカナダ・メソジストによる日本伝道の歴史がある。この問題を扱った二論文（手塚竜磨「カナダ・メソジスト・ミッションの教育活動―女子教育を中心として―」『英学史研究』一九七二年四月号、馬場伸也「日加文化交渉史序説―カナダ・メソジスト・ミッションと明治の思想家達」『国際関係学研究』三）は、一般に知られることの少ない日加の文化交流を論じたものとして重要である。

以上のように、日加関係についての邦語研究にみられる、テーマがバラエティに富み、かつモノグラフも輩出してきているが、総合的な研究が出るにはまだ日時を必要とする、といった感想は、他の分野における邦語によるカナダ研究に共通するもののようである。カナダ研究は日本において、今後の研究者にとって豊富な鉱脈を有する研究分野といえよう。